

富山県商品開発研究会では、産業デザインの振興と富山ブランドの開発を促すため、最新デザイン情報の収集と共有、情報交流・発信等の事業を行っています。今回は、富山県と富山県新世紀産業機構が取り組むアップサイクル創出プロジェクト「BACCAIng(ばっかいんぐ)」のカンファレンスを紹介します。ものづくりの工程でやむなく捨てられてきたものたちに光を当て、クリエイティブの力でもういちど息づかせる。ものづくりのまち、富山ならではのアップサイクルを探る試みです。

ばっかいんぐ

ものづくりにクリエイティブな始末を

富山県総合デザインセンター統括研究員 堂本 拓哉

ばっかいんぐ という活動名は、「始末」を意味する富山の方言「ばっかい」に由来します。始末とは、ものごとの始めから終わりまで責任をもって関わり、きちんと全うさせること。ムダにしないという意味も含まれます。このばっかいの心がけをつねに忘れず、そして継続するという意志を込めてIngをプラスしました。

【概要】

富山県と公益財団法人富山県新世紀産業機構は、2024年3月に改定した「富山県ものづくり産業未来戦略」に基づき、成長が期待されるサーキュラーエコノミーなどの異業種連携による価値の創出、産学官連携でのオープンイノベーションによる研究開発など、ものづくり産業の飛躍・発展を目指して競争力の更なる強化への取り組みを始めました。令和6年度は、「廃材活用／アップサイクル」をテーマに異業種連携による新たな価値の創出に向けたカンファレンスを開催。第4回目のカンファレンスとなる今回は、過去3回のカンファレンスの振り返りとアップサイクルをテーマに活動する富山県内のクリエイターによる講演を行いました。

【令和6年度カンファレンス(4回)概要】

Conference #1 _____ 2024年9月9日

企業視察：(株)ミヤモリ (小矢部市埴生208)

スポーツウエアや学校体操服を中心に年間60万着の縫製を手がける(株)ミヤモリを訪問。同社では年間20トンも発生する布地の“裁断くず”を炭化させ、それを芯に用いた「服の鉛筆」®を開発するなど、ユニークな活動を展開しています。視察後のディスカッションでは、“捨てない”を促進するためのリペアの仕組みづくりや、余剰品を抑制する生産体制、企業のミッション・ビジョンを社内に浸透させる大切さなどについて意見交換がなされました。

Conference #2 _____ 2024年10月25日

企業視察：(株)リッチェル (富山市水橋桜木136)

訪問したのは、ハウスウェア用品からエクステリア用品、ライフケア用品などプラスチック製品を手がける(株)リッチェル。不良品などの再生活用の様子を見学するとともに、品質基準維持のために廃棄品が増えてしまう、複数の樹脂を混合したプラスチック製品のリサイクルの難しさ...といった課題もヒアリング。ディスカッションでは、再利用の技術的な難易度やコスト、

生活者の理解や意識変革の必要性に焦点が当てられ話し合いが行われました。



Conference #3 _____ 2025年1月17日

企業視察：(株)トヨックス (黒部市前沢4371)

第3回カンファレンスの訪問先は、耐圧ホースと継手製造のトヨックス。同社では原材料樹脂のリサイクルに早くから取り組み、製造ロスの再生原料化を実現してきました。同社のリサイクル工場の見学後は、富山県総合デザインセンターに場所を移し、トヨックス社員の方々にも参加いただき、製造工程で発生する「ドベ(プラスチック材料の残滓)」や使用済み部材の活

用など、アップサイクルをテーマにディスカッションが行われました。



Conference #4 _____ 2025年2月28日

これまでに行われた3回のカンファレンスの総括が行われました。また富山大学芸術文化学部学生、(株)家's(高岡市)、(株)本瀬齋田建築設計事務所(サモアーキ)が、それぞれのアップサイクルへの取り組み事例を紹介。また、来る2025年度活動の方向性が確認されました。

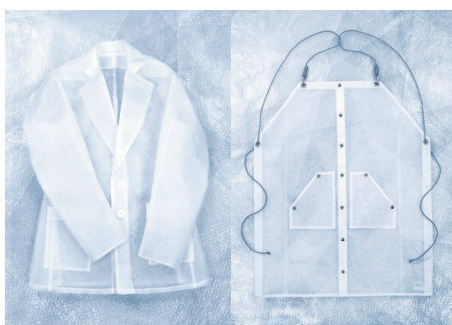
【クリエイター講演概要】

01 ビニール素材をアップサイクルしたファッションアイテム

富山大学芸術文化学部 土井 太智

気泡緩衝材(プチプチ)やビニール傘、レジ袋など、私たちの生活の身近にあるプラスチック素材に着目。一度(数度)使われたら捨てられてしまうものをアップサイクルすることで新たな価値を生み出したいと考えた。上記のようなプラスチック素材を何層にも重ね、熱をかけながらプレスすることで「生地」をつくり、ファッションアイテムの制作を狙った。

素材ごとにそれぞれ実験を重ねた結果、「プチプチ」が品質的に安定していることが判明した。熱圧着機で熱を加え表面を溶かすことで、プラスチック特有の光沢感が消えチープさを抑えた生地をつくることができた。生地の製作と縫製に関しては、株式会社ミヤモリに協力を仰いだ。超音波ミシンとシームテープで生地を接着し、透明な糸で縫製。ジャケット(puchipuchi JACKET)とエプロン(puchipuchi APRON)を製作した。



02 空き家の残置物をアップサイクル、ブランド化

(株)家's 伊藤 昌徳

(株)家'sは、空き家の残置物を加工し流通させる事業を行っている。残置物の約10%は骨董として(価値を認められて)流通するが、残りは廃棄されたり、ほとんど価値がない状態で取引される。それをもう一度、価値をつけた上で流通させたいと思い事業を始めた。アップサイクルでは3つのブランドを展開している。

①P/OP(tansu×acrylic):和ダンスを回収して再生するブランド。経年劣化で背板が割れていたところをカラフルなアクリル板を使って補修することで新しい家具としてアップサイクルした。8割が東京、1割が海外に売れている。



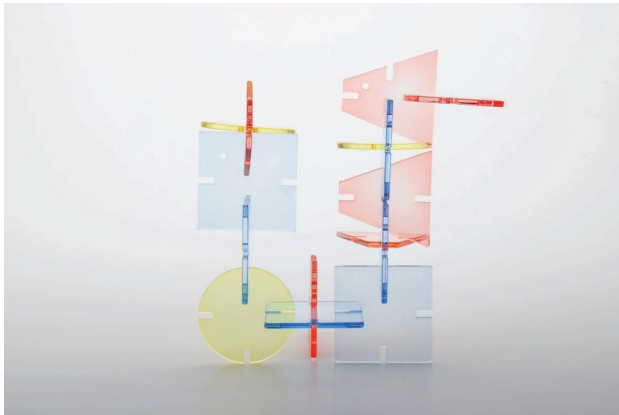
②metabolic:木製の家具や置物などの表面を焼させた。モノの1%しかない表層を変えることで、新たな価値が生まれる。浄化/再生という意味もある。その面白さを楽しんでほしい。



③Re-Bear Project:木彫りの熊をアートの力でアップサイクルしたプロダクトだ。売上の一部は、木彫り熊発祥の町である北海道・八雲町に寄付している。木彫りの熊には大量生産ものと作家ものがあり、大量生産ものを中心にアーティストと再生している。著作権の問題もあるが、モノを"捨てる"、"残す"行為そのものについて少しでも多くの方に考えていただくきっかけになればと思い、活動を続けている。



④Re-design Partition: スシローの店舗で使用されていた飛沫防止用アクリルパーティションを染色・カットし、知育玩具へとアップサイクルする取り組みや、リサイクル事業をやっているアイザック(富山)とコラボし「ラグジュアリ×サステナビリティ」をテーマとするプロジェクトも行っている。



アップサイクルをやっていると思うのは「場所を変えると価値が変わる」ということ。日本で全く売れなかったものが海外に持っていきと売れる。価値とはいったい何なのかと考えさせられる。団塊の世代が終活を迎える時代になり、国内の残置物の量は増え続けている。これを収集できるネットワークづくりが今後の課題。しかし社会に周知すれば回収量は増えるが、倉庫が足りなくなる。それが悩ましいところだ。

03 建築における アップサイクルの試み

サモアーキ((株)本瀬齋田建築設計事務所) 齋田 武亨

県外出身の我々の目から見た富山の風景や場所の持っている魅力をどうすれば引き出していけるか、新鮮なものとして見せていけるかをテーマに設計活動を行っている。

①消滅集落のオーベルジュ: 利賀村の無人となっていた消滅集落にオーベルジュを建てたプロジェクトだ。いわば消滅集落をアップサイクルし、集落の風景をできる限り残しながら再生する試みだった。集落の石垣が残る階段状の高低差をいかし、山からの排水を妨げない建物の配置を心掛けた。また旧集落の屋根部材や雪囲いをデザインに取り入れ、内外装には残存民家の窓枠や外装の木材などを一部再利用した。また住民が利用してきた沢水の取水設備を継承するなど、地域の歴史や風土に根差した施設とした。旧集落の面影を残しながら新しい施設を作っていった。



撮影: 中村絵

②TOYAMAキラリのアップサイクル: プロジェクトに関わったTOYAMAキラリ。その工事現場から、元々ここに建っていた大和百貨店の建物の基礎に使われていた松の杭が出土した。それを加工し、新施設の案内板を製作した。かつての街の風景の記憶を来館者に伝えるものとなればと考えた。

③屋外写真展のための什器: 富山市のまちなか賑わい広場『グランドプラザ』で行われる写真展「フォトキト」のための什器設計プロジェクト。県内の漁業で使われていた漁網を譲り受け、什器のアクセントとして再利用した。木製の什器は毎年繰り返して使え、コンパクトに輸送・収納でき、ボランティアが道具なしで簡単に組み立てられるデザインにした。什器は、街中でイベントなどをする人のために無償で貸し出しもしている。いわば「街を使うための什器」である。この什器はある町の体育館での催事にも使われた。地方にはかつて多目的ホールなどが多く建てられ、今日では使い勝手の悪さから建て替えられるケースも多い。しかしスクラップ&ビルドするのではなく、こうした什器を活用することで新たな生命を吹き込んでいくこともできると考える。

